

Václav Neumann (conductor)

Czech Philharmonic Orchestra

ベドルジハ・スメタナ (1824-84)
Bedřich Smetana

連作交響詩「我が祖国」全曲
My country

1. 交響詩「ヴィシエフラド」 -14:41-
2. 交響詩「ヴァルタヴァ (モルダウ)」 -12:29-
3. 交響詩「シャールカ」 -10:16-
4. 交響詩「ボヘミアの森と草原から」 -12:36-
5. 交響詩「ターボル」 -12:44-
6. 交響詩「ブラニーク」 -14:16-

ヴァーツラフ・ノイマン (指揮)、チェコ・フィルハーモニー管弦楽団
Václav Neumann (conductor), Czech Philharmonic Orchestra

録音：1974年6月30日 東京文化会館

■ 本家チェコ・フィルによる「我が祖国」全曲、日本初演

畠山俊三 (元・TDK株式会社・広報担当)

このCDに収録されている「我が祖国」全曲は1974年、東京文化会館で行われたFM東京「TDKオリジナルコンサート」の公開録音の模様である。

「TDKオリジナルコンサート」、それは“奇跡の番組”である。

コマーシャルを排し、純粋に音楽の感動を音楽ファンに伝えようとした、関係者の情熱から生まれたものである。

「TDKオリジナルコンサート」は1971年11月19日、放送開始したクラシック音楽番組である。それまでの音楽番組といえば、レコードを流すというのが常識だったが、この番組はナマのコンサートを収録して放送しようとするものだった。

ナマ演奏には傷がつきもの、会場のノイズも心配。なによりも演奏家が放送を許可してくれるかどうか分からない。しかも毎回会場が違う等、収録には困難がつきまとう。担当ディレクターの東条碩夫氏 (現・音楽評論家) はこれらの難関に敢然と挑む。

1972年、世紀の名歌手エリザベート・シュワルツコップ、チェロのピエール・フルニエ 1973年、小澤征爾・新日本フィル「天地創造」、マゼール指揮・ベルリン放送交響楽団、ザンデルリンク指揮・ドレスデン国立管弦楽団 1974年、ピアノのマウリツィオ・ポリーニ、ハイティンク指揮アムステルダム・コンセルトヘボウ管弦楽団・・・。

音楽ファン、音楽業界の度肝を抜くラインナップだった。

この番組を支えたのがスポンサーのTDKだった。

現在のTDKはグローバルな電子部品メーカーであるが、当時のTDKは録音テープメーカーとしても発展途上にあった。

広報担当は大のエアチェックファン。市販されている名演のレコードを買うよりも、FMから放送される、

ライブ音楽を録音テープに収録して悦にっていた。

この結果、常識外れの措置がとられた。

1時間の番組提供の場合、前CM、中CM、後CMとコマーシャルが3回入るのが鉄則である。しかし、クラシック音楽は40分以上の曲が多い、曲途中でコマーシャルが入るのは興ざめである。エアチェックファンとしても中CMはない方がよい。というわけで、「TDKオリジナルコンサート」はスポンサーの好意で中CMどころか、前CMも抜いて、コマーシャルは後CMに集約した。

放送局とスポンサーの間に入って調整し、コマーシャルを制作する広告代理店（中央宣興株式会社）の野原博氏（営業）太田昌純（制作）も、この番組を愛していた。

「TDKオリジナルコンサート」後CMの内容は①本編の音楽のイメージを助長したものか②エアチェックファンの為の情報に絞って制作された。商品の良さを直接連呼するよりも、そちらの方が商品のイメージアップにつながるという読みがあった。

1974年「TDKオリジナルコンサート」は放送開始3周年を迎える。

中央宣興（FM東京）がTDKに持ち込んだと特別企画は、ノイマン指揮チェコ・フィルハーモニー管弦楽団によるスメタナ作曲・交響詩「我が祖国」全曲。聴取者無料招待だった。

「我が祖国」といえば、その中の「第2曲・モルダウ」は有名だが、他の曲は知られていない。「チェコ・フィルなら“新世界”がいいのではないかと？ “我が祖国”で大丈夫か？」という声がTDK社内にあった。

しかし、「TDKオリジナルコンサート」は名前の通り、オリジナリティをポリシーとしている。チェコ・フィルは3回目の来日だが、今までドボルザークと並ぶ祖国の大作作曲家スメタナの「我が祖国」全曲を日本で演奏したことがない。これを初演するのは番組の趣旨と合致する。しかもこの年はスメタナの生誕150年に当たっていた。

次は予算である。番組そのものにも多額の予算を使用している上に特別番組に1千万円以上の予算を投じる価値があるのか……。これについては3年に亘る番組の実績によって築かれた、FM東京とTDKトップの信頼関係により解決された。

ところで、チェコ・フィルによる「わが祖国」全曲の公演は当初予定になかった曲目である。つまり、「TDK

オリジナルコンサート」の持ち込み企画だった。

1974年春、「ヴァツラフ・ノイマン指揮＝チェコ・フィルハーモニー管弦楽団特別演奏会。スメタナ作曲 交響詩「我が祖国」全曲。無料公開録音」の告知がFM番組誌に掲載される。エフエム東京に応募ハガキが殺到。その数は11万5千通に達した。「これはたしか、2～3年後に“さだまさしコンサート”により破られるまで、エフエム東京公開録音としてはベストの記録だったはずである。もちろんクラシックの演奏会としては空前絶後の反応というべきだろう。招聘元の新芸術家協会では、なぜかこの曲目を一般公演に盛り込んでいなかった。理由は、公演として経済的に成り立つかどうか、目算が立たなかったからだという」（TOKYO FM出版「伝説のクラシック・ライヴ」）

この後、チェコ・フィルは14回来日しているが、6回「我が祖国」全曲を演奏プログラムに取り上げている。つまり、1974年の「TDKオリジナルコンサート」がきっかけで、「我が祖国」全曲はチェコ・フィルのメジャープログラムになったといえる。

1974年（昭和49）6月30日（日）、上野・東京文化会館。この日マチネーで公開録音が行われた。当選ハガキを懷に聴取者が早朝から会場を取り囲む。全自由席なので、混乱が起きないようにFM東京は万全の体制で臨む。

当選者は2千名。列の末尾に抽選に漏れたファンも並ぶ。

「立ち席でもいいですから、なんとか入れて下さい」

「消防法で禁じられていますから、ダメです」

ホール入口で押し問答が続いた。

満員の聴衆が待ち侘びる中、ノイマンが登場。割れんばかりの拍手。演奏前の拍手としては異例の熱さである。広報マンとしては満員の客に吸収されて音がデット（残響が短くなる）になるのではないかと心配したが、そんな危惧はどこへやら、ノイマンの熱演は聴衆を圧倒した。

その記念すべき名演が38年後、ついにCDになった。

（演奏会の模様は1974年7月12日、19日、FM東京、FM福岡、FM愛知、7月16日、23日、FM大阪で放送された。）